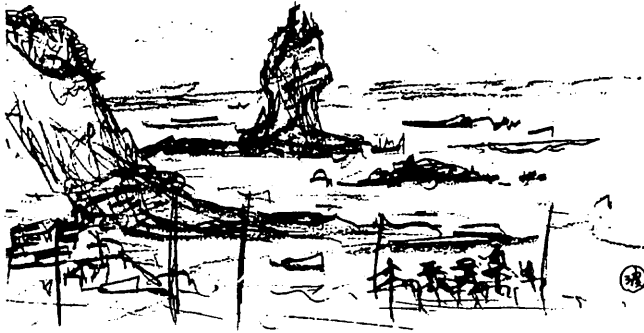


教育センターだより

第9号



目 次

4年目を迎えて……………	1
教 育 研 究 部	
経営研究室……………	2
教科研究室……………	3
教育相談研究室……………	4
科 学 技 術 研 究 部	
理科研究室……………	5
技術家庭研究室……………	6
昭和48年度学校調査結果の概要……………	7
告 知 板……………	8

4年目を迎えて

秋田県教育センター所長

小田島 邦夫

旧教育研究所と理科センターを統合し、名実ともに総合的な教育センターとして発足してから満三年を経過した。その間、教職員の研修、教育研究、奉仕活動、

調査統計の四本の柱を中心にして各事業を推進してきた。いわばこの三年間は基礎固めの時期であった。

科学技術のすさまじい進歩発展、情報化社会の激しい動きは教育界に対しても絶えず影響し、教育現代化の要請はいよいよ強いものがある。当教育センターにおいても、これら諸情勢に対応し、本年度各事業を計画するに当たり、各事業を検討し改善を加えることに努めたのである。

研修事業については、これまで年間120余の講座に4千人の受講者を教え、全教職員が一度はセンターで受講できるようにという当初の計画をだいたい達成した。本年度は研修講座を精選し、あるいは整理統合して、その内容を充実すること、密度の濃いものにする、その方式を多様化すること等に努めて編成した。その実施に当たっては、学習指導の改善に資するため教育機器の研修をできるだけ各講座に取りいれるとか、実験、実習、演習、討議の方法により基礎的な知識技能を修得するとともに現場の問題解決に役だつものであるよう努める方針である。

教育研究事業については、当面する教育上の諸問題の解明を図り、それを研修事業にいかし、またその成

果を発表して教育現場に資料を提供する等のことを継続していくことに変わりないが、現場がかかえている今日の問題を適確にとらえること、その成果が効果的に現場にいかされることという点にいつその力をいれていきたい。

奉仕事業としての教育相談は、その件数年々増加し昨年度は458件に達した。教育相談に対する理解が深まり、社会的要請の大なることを示すものとして喜ぶべきことである。本年度は必要器具を充実するなどして、増加する来所者に対し効果的に相談を進める。奉仕事業の今一つに、教育に関する図書、研究物等の資料を集収整理し活用に資するという部門がある。昨年度も「教育研究資料件名目録第5集」を発行したが、この面の活動は基本的なものでありながら最も手薄であり弱体であったことはいなめない。本年度はこの教育情報の集収整理、活用の面の強化を図って要請に答えたい。

調査統計事業についてはこれまで同様教育施策樹立のための、あるいは教育研究に活用される基礎的資料を得るための調査統計を進める。

以上本年度の各事業の基本方針について簡単に述べた。これを真に実りあるものにするべく所員一同がんばっているところであるが、各関係機関、諸先生のご叱声、ご協力をこれまで同様お願いするしだいである。

教育研究部

経営研究室

I 経営研修講座の充実のために

学校経営の近代化をめざすため、「その合理化、民主化」の課題は、相当はやくからいわれてきたが、現場の問題として どのように受けとめ、どのように具現化したらよいか 今年度の研修をとおして共に考えていきたい。

ともすると教科、領域、学級に固執しがちなのが常であるが、小・中・高の学習指導要領第1章の総則「指導の効率を高めるため、教師の特性を生かすとともに教師の協力的な指導がなされるようにくふうすること」に着目し、学校教育目標実現のため、学校全体の立場にたって考えてみたい。

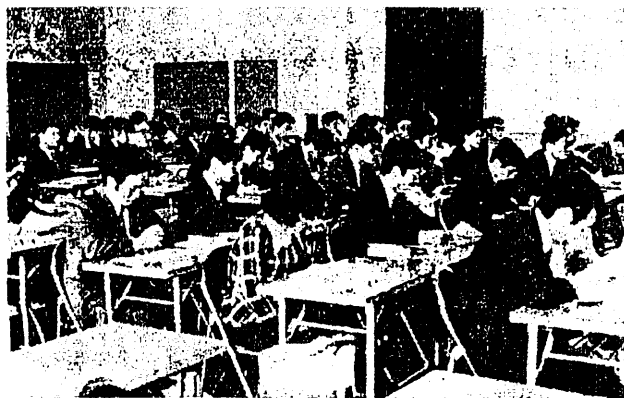
企業でも学校教育においても、目標実現のためのプロセスとして、計画、実践、評価といった一連のサイクルがあるはずだし、それが当然のことである。

学習評価の分野は相当進んでいるが、学校評価はまだまだ開発の余ちが残されており、この面も考えてみたい。

講座名も整理統合し、学校経営、学年・学級経営、教職教養、へき地教育、定時制教育研修講座とした。また希望者による学校評価法研修講座も開設した。

講座によっては明日からの学校で役だつ速効薬的内容もあろうが、当研究室の講座は、それにくらべるといろいろ違った面のあることをご理解いただきたい。メディアにより発生する情報の総和が50年は40年の5倍60年は50年の10倍つまり40年の50倍とかいわれているが、その情報をより正確に、よりはやくとらえ、講座内容にとり入れて新鮮なものになるようつとめたい。

II 教職教養研修講座から



教職教養研修講座Ⅰ（新任事務職員18名対象）が4月19・20日に行なわれたのにつづいて、同講座Ⅱ（新任教諭72名対象、前期）が5月9～11日、当センターで行なわれた。第1日の国立教育研究所の大野連太郎先生の講演「授業のシステム化とその課題」を中心に、教師の使命、教育公務員の権利と義務、指導要録記入法教育統計法、リクリエーションなどを行なった。講師の先生が急病で来られなくなり、当日の朝にピンチヒッターを依頼するなど担当者をあわてさせる場面もあったが、熱心な受講の先生がたの協力で無事に終わることができた。9月5～8日には後期の講座を行なうが前半はソシオメトリーの作成法など実務的なものを、後半は会場を学校（大曲小・中・高を予定）に移して授業研究をする。このときは、会場の関係で全員同じ宿に2泊するので、受講者どうしの親睦をいっそう深めることもできるであろう。

◎ 学校経営と教育機器

教育機器は学習成立のための手段・方法であり道具であって、教授・学習過程の効率化に役だつものと定義されている。

学校が有限な経費をつかい、一定の期間内に、合目的に営まれているものであるかぎり、そこに表われる教育効果は数量的測定にたえるものでなければならない。機器の中でoutputの働きをする反応分析装置はこの命題に大きく答えてくれるであろう。

学校経営現代化の流れの中で「科学化・合理化」にはたす教育機器の役割はきわめて大きい。財源・教師の研修・プログラミング作成等経営上の課題は多いけれども、あとう限り活用し「指導の効率」をあげたいものである。

教育研究部

教科研究室

本年度教科研究室が担当する研修講座は、講座内容の充実と教育機器を導入した研修方法を採用することを二本の柱にしている。特に新規の講座では、希望者を対象とし、5教科総合版の学習指導講座とLLVTR、OHPアナライザーの理論と実技を内容とした教育機器研修講座が新設されたことが特色である。

国語科——小中高とも文学教材を領域とした教材研究を内容とし、授業研究と演習面を重視する講座にした。なお、中高では中央講師の講演による現代・近世文学の作品研究を充実させていきたい。

社会科——小中高とも講座最終日には、地域の理解を深める意味で、県企画調整部担当官による「本県における地域開発の現状と課題」の講義と、秋田臨海地域の地域見学を行なう予定である。

算数・数学科——昨年と同じ領域と方法で第2次5ヶ年計画にしたがって、数学教育現代化の方向について理解を深めようとする。数学教育現代化講座は前期3日、後期2日(11月19～20日)の延5日間の日程となる。

英語科——LLによる音声練習を主にしながら、OHPの利用法、TPシートの作成実技、録音教材の利用などについて、現場の実践例を発表し協議する。また授業の実際をとおして教育機器の活用を研究する。

音楽科——小学校は鍵盤和音を中心にして編曲法に展開させ、合奏実技を通して技術の定着化を図る。アルトリコーダー実技も行なう。中高は日本音楽について資料研究を行ない、高校には編曲法実技も含む。

美術科——彫塑学習の基本的事項を習得し、日常学習に役だつことを研修目的にしている。特に形態のとらえ方や基本とはなにかについて研究を深め、具体的な指導に生かすような講座内容にしている。

郷土教育資料(社会編)の作成はじまる

「豊かな生活空間の創造」は、福祉社会を建設しようとする県政の大きな柱になってきた。県民一体となって郷土秋田のよさを再発見し、次の世代のためにもよき郷土を建設することが、われわれに与えられた大きな課題である。また、小・中・高校の社会科教育をすすめるために、世界の中の日本、日本の中の秋田県について理解を助ける資料の必要性が、教育関係者を中心に各方面から求められてきたので、ことしから2年計画で作成すべく準備をすすめている。

共同研究の成果をまとめたい

昭和45年度から進めてきた「学習指導改善のための学習評価に関する研究」は、本年度で4年目を迎えて集約することになった。国語、社会、算数、音楽、図工・美術の5教科であるが、教科によっては、担当者の異動などによって必ずしも同一歩調で進めがたい面もあった。本年は、次にかかげるサブテーマによって研究が進められる。

国語科——中学校国語科における文学教材の読解指導過程にかかわる評価の観点とその方法——前年度の研究をふまえて、具体的に文学教材を選択し、その指導過程における評価の観点と方法を授業のなかで探究する。

・研究協力委員——秋大附中 中野伸教諭、中川康三教諭、城南中 佐藤庸子教諭、県立秋田高校 山岡雄平教諭。

社会科——小学校社会科における学習評価の観点と方法の再検討——一昨年は1年から6年までの全単元にわたって観点と方法を設定し、昨年の5年の工業単元についての授業実践の結果を反省し、上記サブテーマにしたがって内容をまとめたい。

・研究協力委員——県指導課 千葉信一郎指導主事、秋田市教委 梅津嘉弘指導主事、秋大附小 有明孝教諭、築山小 佐藤喜代治教諭、川尻小 西宮三夫教諭。

算数科——算数科の授業に集団反応分析装置を導入して——一昨年の研究から、「授業の評価は、子どもが授業を通してどのような変化を生じたかを確認し、改善を要する点を明らかにするものでなければならない」との結論を得た。そこで、集団反応分析装置による確認のし方を提示したい。

・研究協力委員——築山小 佐藤勇教諭。

音楽科——小学校音楽科における基礎能力の指導段階の設定と評価の方法について——実験授業によって指導段階を検討したい。

・研究協力委員——大川西根小 伊藤辰雄教諭、阿気小 小山薫教諭。

美術科——中学校美術科における学習過程の評価と表現能力について(彫塑学習を主として)——中学校の彫塑学習の授業を通して評価と表現能力を探究する。

・研究協力委員——山王中 池内広教諭、秋田南中 小柳力教諭、旭北小 斎藤静夫教諭、秋大附中 佐々木信吾教諭。

教育相談研究室



＝昭和48年度研修講座の計画に当たって＝

これまで、講座のたびごとに、受講された先生がたから当該講座に対するご意見、ご要望等をおきかせいただき、これを貴重な手がかりとして次年度講座を計画するという方式をとってきているが、本年度は特に次の諸講座について、県外講師を招へいするほか、内容の盛り方にもくふうをこらし、いっそうの充実を図ることにした。

○ 中・高生徒指導研修講座 [023]

千葉大学助教授 坂本昇一氏を昨年に引き続き招へい。ガイダンス研究の権威として知られる氏の今年の講義は、「学校におけるカウンセリング的指導」を予定している。そのほか講座内容として、生徒指導の組織と運営、教育相談の方法、調査・検査を生かした指導事例の研究等が盛り込まれている。

○ 高等学校進路指導研修講座 [018]

日本大学教授 伊藤祐時氏を招へいして、「職業的発達の理論と高等学校における進路指導のあり方」と題して講義していただく予定である。ほかに講座の内容として、進路指導についての事例研究、進路相談の進め方、調査・検査の方法と活用、進路指導研究の動向について、などが盛り込まれている。

○ 小学校生徒指導研修講座 [027]

本年度から新たに設けられた講座であるが、この講座には、東北学院大学教授 村田良一氏を講師に招き、「小学校教育と生徒指導」について解明していただく予定である。そのほか、講座内容としては、心理検査演習、困った子の指導事例研究、児童理解について、などが予定されている。

○ 臨床検査技術研修講座 [055, 056]

本講座もおおかたの要望にこたえて新設された講座の一つであるが、数多くの臨床検査例をお持ちの宮城教育大学助教授 田中農夫氏を招へいして、知能検査法、性格検査法等の実技指導をしていただく予定。ほかに、脳波測定技術の研修、障害児観察法について、などの内容を予定に盛り込んでいる。

＝本年度研究の構想＝

総合主題は、「児童・生徒の人格形成のための全人的指導に関する研究」とすることとし、分担方式によって研究を進めることにした。

分担研究のテーマおよび担当者は次のとおりである。

- A. 面接的場面における児童・生徒の言語表現についての研究。(向山 清指導主事)
- B. 箱庭療法による心理治療 - 身体神経症児への適用を中心に。(伊藤弘四指導主事)
- C. 進路の指導に果たす保護者の役割について - 中・高生徒の保護者の実態。(木村志義指導主事)

＝子どものことで困っている親に

来所をおすすめください＝

今年も、親子のための教育相談を行なっています。検査・計測、カウンセリング、遊戯療法、催眠療法等によって、指導・治療にあたっています。

電話(32-3594)でも郵便でも、随時申し込みを受けます。昨年度の利用状況は下のとおりです。

主訴別・校種別件数・面接延数

	知能障害	学業不振	言語障害	神経症	反社会性	登校拒否	夜尿卓酔	進路適性	計	面接延数
幼児	10		10	14			4		38	88
小学生	287	1	5	10	2	4	15		324	471
中学生	41		2	6	4	10	7	3	73	173
高校生			1	9	1	9		3	23	67
計	338	1	18	39	7	23	26	6	458	799

居住地別件数

	秋田 河辺	男鹿 南秋	本荘 由利	大曲 仙北	横手 平鹿	湯沢 雄勝	能代 山本	大館 北秋	鹿角	県外	計
来所	64	13	15	11	8	2	9	13	2	1	138
出張	53	92		48	37		10	20	60		320
計	117	105	15	59	45	2	19	33	62	1	458

科学技術研究部

理 科 研 究 室

研修事業についての一問一答

— 本年度の研修講座を実施するにあたっての基本的な考え方はどうでしょうか。 —

文部省による理科教育現代化講座第1次5か年計画は昨年度で終わり、本年度から第2次5か年計画が打ち出されています。というのは「現代化」はこれからの理科教育の方向に大きな示唆を与えるものですから第1次だけでは主旨徹底が十分とはいえないからでしょう。

本県としてもこの「現代化」を柱として諸講座を実施してゆきたいと考えています。

— もう少し具体的に伺いたいのですが —

要約しますと次のようになると思います。

- ・ 現代化の考え方を吟味しながらその線にそった実験法や指導上の問題点を取りあげる。
 - ・ できるだけ現場に密着した問題を取りあげ、すぐにでも授業に役だつような内容にしたい。
 - ・ 普及の段階から深化の段階に移ったとも考えられるので、受講者ひとり当たりの受講日数を増加させた。
- 学校に配られた研修講座一覧表を見ますと“希望者”の講座がありますが理科関係ではどんなものがありますか。 —

天体観測と実技研修（ガラス細工・顕微鏡）があります。旧理科教育センター時代からいろいろな曲折を経て、昨年度は一般の理科研修講座に組み入れておりましたが、本年度から独立させてみました。

— どんなねらいがあるのでしょうか —

いずれも教材そのものではないが教材に関係深い基本技能を中心としています。ふつうの研修講座で内容の深化を図るとこうした技能面の題材を十分にこなすことが時間的にむずかしいので独立させました。それに希望者だけでじっくりやってもらい、自分でもやればできるという自信をつけていただくためです。

さらに本年度の結果や現場からの希望を参考にして次年度以降に反映させたいものと思っています。

— そのほかに、本年度の特徴といえるものがありましたら…… —

県センターの設備をフルに活用していただくため、できるだけセンターを会場として講座を開催する予定です。遠方の受講者にはご不便をおかけしますが、こ

のへんの事情をご了承いただきたいと思います。しかし女教員理科研修講座は従来どおり県南、県北会場で開催しますし、野外観察研修講座などは例外です。

また講座とは直接関係ありませんが、長い歴史を持つ長期研修生制度が本年度から小・中関係だけでなく高校にも上げられました。本年度は生物と化学に高校からの長研究生が入所することになっています。

— 受講後にアンケートをとっているようですが、昨年度の傾向とかこれらの対策などはどうでしょうか。 —

開始・終了時刻や講座内容・形態など多岐にわたっています。その中にはこちら立てればあちらが立たずといったものもありますが、解決可能なものは積極的に改善しています。たとえば開始時刻などは本年度から改められてほぼ要望に応じられるのではないかと思います。

研修内容を事前に知っておきたいという要望が多くなりましたが、これについては一覧表や実施要項でできるだけ内容を詳述するとともに参考になるような文献を紹介することに努めておりますので目を通してください。

今後もアンケートを参考にして、いろいろ改善してゆきたいと思います。

— 最後に受講される先生たちに望むこと、期待したいことがあれば伺いたいのですが。 —

実施要項等で受講内容を従来より詳しく連絡しますので、事前研修の資料としていただければ幸いです。また内容にまつわる諸問題を持ち寄って提示するなど、気軽にのびのびとした気持ちで参加されることを望みたいです。

— 全県児童・生徒理科研究発表大会について —

この研究発表大会は今年で第8回目を迎えることになるが、前回は、全県から小学校50題、中学校29題、高等学校12題の発表があり、年ごとに内容の充実した会となっている。

一学期もなかばになり、すでに先生がたは指導に着手されていることと思われるが、ことしは下記の期日に行なうことにしたので夏休みなどを利用して、よりよい発表ができるよう心がけていただきたい。

小学校 11月7日

中学校 11月8日（実施要項は後日配布する）

高等学校 11月9日

技術家庭研究室

ことしの研修講座

四年目を迎えた当研究室は、新たな研修計画のもとに、当面する課題の解決をはかりたいと考えている。

その一つとしてとり上げたのは、共通研修である。いままでは、1受講者1領域研修によって領域の深化を図ってきた。本年度は研修期間を延ばすとともに、参加者全員が一堂に会し、討議、演習等を通して領域をこえたより広範な課題について研修を深めるために、共通研修日を設けたことである。

二つめは、講座について予習課題を設けたり、情報交換資料を提示してもらうことにより、講座の密度をより濃いものにしたいと考えている。受講される諸先生の積極的な参加をお願いしたい。

◆ 小学校家庭科研修講座

ことしから研修日数が3日間となり、いっそう内容充実を図りたいと考えている。第1、第2日と第3日の午前中は、被服、食物の領域研修で、被服整理、炊飯、しる物についての研修を計画している。第3日の午後は、共通研修で、先生がたにご持参いただいた学習指導案に研修内容を加味した資料の作成と、情報交換を予定している。なお資料の作成については、学習指導案に関連した、学習指導にすぐ役立つTPシートを作成していただくよう計画している。

◆ 技術実技研修講座 (男子向き)

ことしの研修講座の特色としてあげられることは、研修日程4日間の1日をさき、共通研修として教育工学についての研修を計画したことである。

この計画では、フローチャートによる学習指導案の作成のしかた、各学校での実践例の紹介や情報交換など、またアナライザーと教材提示機器とを連動させた「自動教授装置(MAI)」を活用した授業展開例の紹介などを内容として、第1日目に実施する。

班別研修は従来どおり、文部省研究の手びきの内容を中心に、木材加工、金属加工、機械、電気の4領域について実施するので、受講者の中で研究の手びきをまだご準備してない方は、至急購入していただきたい。

◆ 技術・家庭科教材研修講座(新設)

これは希望者を対象としたもので、実技研修講座が「研究の手びき」を中心としているのにたいし、これはすぐ授業に役だつことをねらいとし、教材等についての研修を行なうものである。アンケートなどを参考にし、ことしは次の項目を取りあげた。

「木工機械、工具の点検と操作」「金工機械、測定工具の点検と操作」(以上、男子向き)「ブラウスとスカートの縫製」「裁縫ミシンの機構模型製作」「回路計の原理と取り扱い方、TP製作」「着色料の検出および揚げ物の調理」(以上、女子向き)

◆ 技術実技研修講座 (女子向き)

女子向きの実技研修講座は、昨年までは、住居、家庭機械、家庭電気の3領域について実施していたが、ことしからこれらに被服、食物領域をも加えて実施するように計画されている。第1回は、住居、家庭機械、家庭電気、食物の各領域、第2回は、食物にかかわって被服領域がはいる編成になっている。

領域ごとの班別研修のほかに、最終日の午後に、共通研修として、最近盛んに使用され、その効果も高く評価されているOHPの効果的な使用法などについての紹介を計画している。受講の先生がたは、授業に使用したTPシートをご持参いただきたい。



家庭科研修講座から

◆ 高等学校家庭科 研修講座

従来どおりの2日間の日程で、被服、食物それぞれ

2回ずつ実施する。内容は昨年と変わり被服では、被服整理とデザインの分野をとりあげ、洗浄の基礎実験と洗たく、仕上げ、しみ抜きに関する実験実習。デザインについては、形態や色彩などの問題点をとりあげてみた。

食物では、実験を中心として調理上の問題点の解明と、家庭経営の視点から調理のあり方などにもふれるように計画し、またそれに伴い、実験器具類をも多く使用できる内容にしたいと思っている。

* * *

中学校技術・家庭科 研究の手びき(文部省編)
木工・金工・住居編 113円 開隆堂出版
機械・電気編 119円 実教出版

昭和48年度学校調査結果の概要

毎年当センターが行なっている「学校調査」（5月1日現在）の昭和48年度分結果がまとまったので、その概要をのべる。詳細は7月中旬発行予定の「学校統計一覧」に登載するのでご利用ください。

なお、統計表は公立学校のみとし、国立、私立学校分は備考欄に計上した。

1. 学校数・学級数

区 分	学 校 数				学 級 数											47年度
					単 式 学 級						複 式 学 級					
	本校	分校	計	47年度	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	複式学級	特殊学級	計		
小 学 校	372	45	417	423	548	558	596	588	604	614	3,508	180	221	3,909	3,997	
中 学 校	167	8	175	176	559	587	614				1,760	5	116	1,881	1,941	
高 校	全日制	50		50	50	381	381	378				1,140			1,140	916
	定時制	29	26	55	56	85	89	82	91			347	6		353	358
	通信制	1		1	1											
特殊学校	3	3	6	6	幼3	小36	中21	高13	専6	別1	80	小4中4		88	93	

(備考) 国立小学校1校 18学級 国立中学校1校 12学級 私立中学校1校 6学級 私立高校5校 150学級
国立養護学校1校 小学部3学級 中学部3学級 高等部1

(注) 特殊学校欄中、幼、小、中、高、専、別とあるのは幼稚部、小学部、中学部、高等部、高等部専攻科(二部含む)高等部別科のことである。

2. 児童・生徒数

区 分	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	47年度
小 学 校	15,819	17,292	19,259	19,354	19,819	20,262	111,805	117,042
中 学 校	20,727	21,881	23,072				65,680	68,644
高 校	全日制	15,118	14,911	14,745			44,774	45,250
	定時制	1,612	1,475	1,450	1,595		6,132	6,465
	通信制	416	214	140	115		885	891
特殊学校	幼13	小220	中129	高78	専36	別5	481	488

(注) 高校は本科生のみ計上

(備考)
国立小学校 711
国立中学校 518
私立中学校 229
私立高校 7,652
国立養護学校 60

3. 教職員数

区 分	校長	教 諭		助 教 諭		養 護 教 諭		講 師		合 計		47年度	事 務 職 員			47年度	
		男	女	男	女	教諭	助教	男	女	男	女		計	男	女		計
小 学 校	372	2,112	2,620	1	1	160	5	60	63	2,545	2,849	5,394	5,431	80	30	110	109
中 学 校	153	2,366	888			93	7	29	35	2,548	1,023	3,571	3,635	122	23	145	140
高 校	全日制	50	2,004	338		49		34	24	2,088	411	2,499	2,493	135	59	194	186
	定時制	2	348	67		3		9	5	359	75	434	441	30	11	41	41
	通信制		10	1						10	1	11	10	1	1	2	2
特殊学校	3	74	57			3		1	2	78	62	140	134	8	5	13	13

主 事 新 任 者 紹 介



容姿は優雅、円満で誰にも好かれるタイプ。しかし、仕事に対する厳しさは男性以上、正確・迅速で事務能率は抜群。

41年秋田北高校卒業と同時に教育庁総務課に勤務、その後指導課庶務係を経て本年4月調査統計係へ。北高卒業時には最優秀クラスであったとのモッパラの評判。教育庁勤務後も夜は秋田短大に通い、持ち前の根性と誠実さで優秀な成績で卒業された文字どおりの才媛。

趣味はボーリングと旅行。茶道は師範代

永年求めていた理想の男性を見つけ、本年1月結婚のほやほや。秋田市保戸野生れの生粋の秋田美人。

統計教育についてのお知らせ

1. 機関誌購読会員募集

全国統計教育研究協議会では、統計教育の研究実践を高めるとともに、普及推進を図るために、統計教育研究者の情報交換を目的とした機関誌「統計教育研究」を年3回発行しております。この機関誌は市販や分売せず会費制として個人の年額500円の会費によって提供しております。

現在、今年度の会員を募集中ですので、希望者は秋田市保戸野小学校内の秋田県統計教育部会（担当者石川五郎先生）あてお申し込みください。(6月20日)

2. 公開研究会の開催予定

全県公開	10月5日(金)	中仙中学校
中央地区	10月9日(火)	加茂青砂小・中学校
県北地区	10月12日(金)	阿仁第二中学校

告 知 板

○ 課 名 の 変 更

(新) 総務課 (旧) 庶務課

○ 所 員 の 異 動

〈 転 出 〉

・主任 渡辺文雄、本庁総務課施設第一係主任へ

〈 転 入 〉

・主事 浅利ケイ子、本庁指導課庶務係から

〈 所 内 〉

・主任 熊谷善一、教育センター総務課庶務係

・主事 成見 甫、同 上

○ 昭 和 47 年 度 刊 行 物

- ・ A E C 2 9 学校統計一覧
- ・ " 3 0 複式学級学習資料
こくごのとも 1ねん-2ねん
- ・ " 3 1 中学校理科実験観察カード(第
3集)教材編
- ・ " 3 2 研修集録(第4集)
- ・ " 3 3 研究紀要(第4集)
- ・ " 3 4 本県教育費の実態
- ・ " 3 5 調査統計報告書
- ・ " 3 6 教育研究資料 件名目録(V)

○ 長 期 研 修 生 (前 期)

○入所式 5月2日(水)

○研修報告会 9月20日(木)

○修了式 9月29日(土)

・北秋田郡森吉町立前田小学校教諭 桂 邦夫
(理科研究室)

小学校気象教材の検討

—気温と太陽放射熱の関係を中心にして—

・能代市立常盤中学校教諭 宮腰吉則
(教科研究室)

中学校美術科における彫塑教材の研修

—展開における問題点をふまえた彫塑的作品
の製作—

・秋田市立城南中学校教諭 竹田紋子

・大曲市立大曲中学校教諭 三浦幸子
(技術家庭研究室)

技術・家庭科女子向き(食物、被服、住居、
家庭電気)の指導上の問題点とその考察

・秋田市立高清水中学校教諭 仙北谷岩夫
(教科研究室)情報化社会に対応する作文(意見

・主張文を中心とする)指導はどうあればよいか

・平鹿郡大雄村立阿気小学校教諭 小山 薫

(教科研究室)小学校音楽科における基礎領域
の指導段階の設定

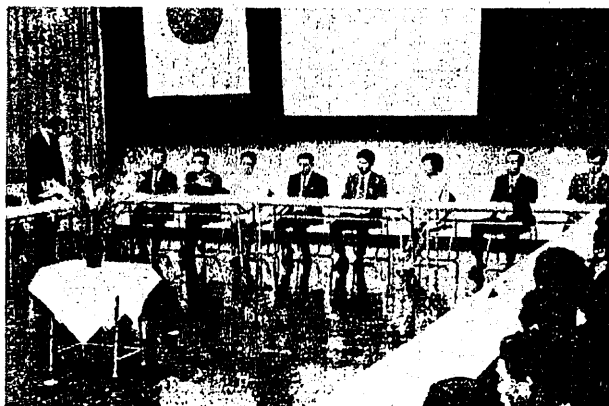
・秋田県立盲学校教諭 柏谷 学

(教育相談研究室)全盲児の図形認知に関する
考察

・秋田県立角館高等学校教諭 高橋明男
(理科研究室)

・カイコの幼虫の後部糸腺から核酸の抽出お
よびその他の実験

・ショウジョウバエの遺伝およびその他の実
験



長期研修生入所式風景

○ 所 員 研 究 発 表 会 ・ 後 期 長 研 修 研 修 報 告 会 の 予 定

昭和49年2月15日(金)

編集後記 風薫る五月、48年度のスタートに合わせて、「教育センターだより第9号」をお届けいたします。10月に第10号、2月に第11号発刊の予定ですが、本号は、年度当初に当たり、48年度の事業計画を主軸に編集しました。当センターの事業推進に対して、いっそうのご理解を深めていただければ幸いです。

教育センターだより 第 9 号

発行年月日 昭和48年5月31日

編集発行者 秋田県教育センター

秋田市仁井田字渦中島 297の11